

22. CPD のレ線学的考察

—特に CPD 発生骨盤要因の抽出について—

小堀恒雄, 飯島日出男 (千大)

CPD に関する測定項目について得られた値が CPD 発生要因としてどの程度の意義を持つかを検討した。特に各測定項目について限外値を示したものの帝切及び鉗子率を対照群と比較し、各測定項目の中から CPD 発生因子として有意なものを抽出した。その中、最大の有意性を示したものは最短前後径一児頭大横径であった。

23. 遺伝相談とその症例

新井一夫 (君津中央)

遺伝に関する問題は多いが、これを解決する一つに遺伝相談がある。この方面への国家的対策の一つとして、遺伝相談センターが去る10月1日に開所されたが、全国的な組織は未だ確立されていない。遺伝相談はいかにして行なわれるかを紹介すると同時に、過去に行なった症例のいくつかを報告する。

24. 致死性四肢短縮型小人症

—特に Achondrogenesis に対する考察—

新井一夫 (君津中央)

生下時に四肢短縮を伴う小人症は、過去には“胎児性軟骨異常栄養症”のもとに分類されていたものが多い。近時これらが独立疾患名により細分類されてきた。Achondrogenesis は、致死性のこの種疾患の一つであり、常染色体性劣性遺伝形式をする。本症例は世界文献中には50例余あるが、本邦例は少ない。本症例の報告と共に、致死性四肢短縮型小人症についてふれたい。

25. 児生下時体重と母体側因子について

柴田皓三, 片山純男 (船橋中央)

昭和50年から2カ年間の分娩中、重症合併症のない単胎満期産例1173例につき、児体重と在胎週数及び母体側因子(身長・体重・体重増加・肥満度・腹囲・子宮底長)との関係を検討した(肥満度は松木の標準体重を使用)。

児体重と週数との間には、直線相関 ($r=0.3826$) が認められ、週数因子を加えて、母体側因子を検討したところ、分娩前肥満度が比較的よい重相関 ($R=0.5179$) を示した。

26. 高速走査型超音波診断装置の使用経験

園田俊雄, 吉田哲夫, 高野 昇
(国立横浜東)

近年、超音波検査法は産婦人科領域において必須の検査法となった。最近我々は170名の患者に高速電子スキャンを使用し、特に産科領域(ことに早期の異常妊娠)において、その優位性を確認した。高速電子スキャンは大きなものの全体像の把握が困難であるという欠点をもつが、その手技の習熟の不必要なこと、また動態観察が可能であるという、大きな利点を持ち、今後、手動走査型との併用により、診断の一助として有効であることを確認した。

27. 超音波断層法による子宮内膜症の診断

天神弘尊 (千大)

Endometrial cyst の超音波診断上の特徴は1) cystic mass の輪廓は clear cyst ほど平滑ではないこと、2) cystic mass の中に淡いエコーが存在することが多く、皮様嚢腫よりはエコーが少ないこと、3) 周囲に dense なエコーが存在すれば癒着を疑わせる点である。超音波診断上、endometrial cyst と鑑別を要するものに、皮様嚢腫、ダグラス窩に存在する子宮筋腫があり、その他にも膿瘍、卵巣癌とも鑑別が難しいことがある。

28. 妊娠に合併した尖圭コンジローム

森川真一 (千大)

妊娠初期に尖圭コンジロームに罹患し、その後、腫瘤が急激に増大するも、抗生物質、PSK の内服、膣洗等の保存的療法にて、分娩後ほぼ消失せる1例を経験したので、文献的考察を加え発表する。尖圭コンジロームの頻度は0.17~0.20%であり、妊娠中に好発(60~70%)のため、時に経膣分娩不能例もある。また vulvar cancer との合併は7~9%であり、十分その点に留意し経過観察が必要と思われる。

29. 外陰潰瘍を呈する外陰ヘルペスの6例

飯田昌義 (蕨市)

外陰ヘルペスは coitus により感染し、最近多く見られるように思われる。診断は臨床症状と細胞診によった。

当院での頻度は1年間に6例(総外来患者数の0.87%)、年齢は20~28歳、職業はトルコ嬢にやや多い。主訴は痛痒い~痛い、排尿時状はにしみる等。症小陰唇内